

2010年10月7日
聖カタリナ大学社会福祉学部社会福祉学科
4回生 岩本菜美

JMAS・カンボジアでの研修を終えて

研修場所：カムリエン郡タサエンコミュニン
研修期間：2010年9月7日～9月14日

1、はじめに

「私、カンボジア行くの」友人からそんな言葉を聞き、どこにカンボジアがあるのかさえ分からなかった私がなぜか「私もカンボジアへ行きたい！！」と強く思ったのは2年前でした。しかし、目の前に行くチャンスがありながらもその度に決意できなかったのは、インターネットの注意情報を見たり地雷のことを想像したりするたびに「怖い」という気持ちがあったからです。そんな私がカンボジアへ行くことを決めたのは「実際に現地へ行き、自分の目で見て、肌で感じてみたい」という気持ちが強くなったからでした。

そして何より研修を無事に終わることができたのは、研修を快く許可してくださったJMAS本部の皆様、実際に受け入れてくださった高山さんをはじめ高田さん、バタンバン事務所の皆様、愛媛支部の秀野さん、井伊さん、村人の皆様、ホームステイ先の家族、送り出してくれた家族、カンボジアで出逢ってくれたすべての皆様の大きな理解とサポートがあったからこそだと深く感謝しています。すべてが初めての経験の中、丁寧にご指導くださりありがとうございます。この場をかりて心よりお礼を申し上げます。

2、カンボジアへ足を踏みいれて

タイから車で約5時間揺られながらカンボジア・タサエンへ向かいました。初めての海外経験ということで期待と不安が入り混じっていましたが入国審査を終えて入ったカンボジアは私たちをスクールで迎えてくれました。ちょうどカンボジアでは雨季です。バケツをひっくり返したような豪雨の中、子供たちが外で裸になって嬉しそうに遊んでいる姿は日本ではまず見ない光景です。車が来てもおかまいなしに道の真ん中を我が物顔で座っている牛や萱葺き屋根の家がポツポツと見え始めたときは興奮しました。カンボジアでは当たり前のこんな日常の風景が私たちにとっては初めての経験で、これからのタサエンでの生活に思いを馳せて私の心はワクワクドキドキしていました。



3、不発弾・地雷撤去作業の現場

不発弾・地雷撤去作業の現場へはプロテクターとヘルメットを身に着けて歩いていきます。歩くといっても、道はぬかるんで水溜りだらけで長靴を履いても足をとられて思うように進めないため、一步一步踏みしめながら進んでいかなければならないような所です。さらにその周辺にはどこに地雷があってもおかしくない場所。一列に並んで高山さんの後ろをついて行きます。そんな中、重いプロテクターとヘルメットをつけ、ギラギラと照りつける太陽の下を歩いていくことは現場へ辿りつくだけでも大変な苦勞でした。そんな場所で私と年齢の変わらないデマイナーのみなさんは1日中、神経を使ってこまかい作業をしていきます。あるデマイナーに「こんなに危険で大変な仕事をなぜ選んだのですか？」と尋ねると「カンボジアの将来のために地雷を撤去したいことと、お給料がいいから」という返事が返ってきました。

デマイナーの撤去作業には想像以上の根気が必要です。地雷だけでなくほんの小さな鉄くずにも金属探知機は反応するからです。さらに鉄くずは錆びていて茶色になったものが多く、土と鉄くずを見分けることは困難です。どの地雷原でも数ヶ月で数万個もの鉄くずが出てきます。改めて地雷撤去の作業は気の遠くなる作業だと感じました。そんな仕事をデマイナーは淡々とこなしていきます。

見つけられた地雷はその日のうちに爆破させます。地雷に火薬と導火線をセットした場所から200メートル程離れた場所からその様子を見守っていましたが、想像以上の爆発音と地面から伝わってくる震動、立ち上がる煙に心臓がどきどきと早くなるのが分かりました。百間は一見にしかずとはこのことです。しかし、それでもまだ私は「地雷原にいる」という実感を持たずにいました。こんなに小さくておもちゃみたいなのが人を傷つけ、さらには命を奪うなんて。懸命にここが地雷原であり、今自分が立っているこの場所にも地雷が埋まっているかもしれない「怖い」土地なのだと言いかせました。ここまで来て、地雷が殺傷兵器だという実感さえないまま過ごしてしまうことが情けない気もしましたが、これが今の私が感じた素直な感想です。平和な国に生まれ育った私には、地雷の持つ本当の顔を知るにはまだまだ時間がかかるのかもしれない。



こんなに小さな鉄くず

道なき道

デマイナーの様子

4、村人との出会いを通して

地雷原でのそんな思いを抱えながら過ごしていました。そんな時、村人とのやりとりやインタビューなどを通して感じたことは地雷が村の人々やその先の生活に与える影響の大きさです。

戦争が終わり、土地を求めてこの地へ移り住んだ村人の多くは自分たちの手で土地を開拓し、地雷撤去をし、家を建てて生活を始めました。家から一步でると辺りには畑や田んぼなどで作物を作っていますが、そこに地雷がないという保証はどこにもありません。しかし地雷が埋まっているかもしれないということも分かっているにもかかわらずその中で作物を植えなければ生活していけない現状があるのです。

村には地雷の被害で足を失ってしまった方や怪我をした方もたくさんいます。しかし、だからといってそのことを特別視する人はいません。手を貸すこともしません。それが当たり前なのです。初めて逢った私たちに対しても静かで穏やかな口調で当時のことを語ってくれました。政治の勉強をしようといわれ通っているうちに気づけばポルポト兵として銃を持って戦っていたこと、その当時は14歳だったこと、戦いの途中で地雷を踏み片足を失ったこと。そんな過去を抱えていても「今は家族や村のみんなと一緒に暮らせて毎日が楽しい」と言っています。今を強く生きています。しかし中には地雷の被害に遭ったことで働けず、生活が苦しくなり厳しい環境の中におかれている人がいることも事実です。ポルポト時代の戦いの真っ只に地雷を踏み、両足を失ったある村人は家族が働く畑の収入だけでは薬を払うお金が用意できない経済状況で、行動範囲も家の周りに限られていました。彼は懸命に私たちに向かって「サポートしてください」と訴えます。高山さんはその様子を見て「あれは物乞いではなく、本当にサポートが必要な状態なんや。」と教えてくださいました。カンボジアには保険制度や政府からの金銭的なサポートはありません。だからといって今すぐ整備することができる程単純な世の中ではありませんが、本人の力だけではどうにもならない現実。生まれた環境や過ごしている環境がもたらす影響はその人の人生までも左右しかねないということ、そしてこんなにも村人の生活の中に地雷が溶け込んでいることを知りました。過去の戦争が残した傷痕が今でも牙をむいて人々を脅かしていることをまざまざと見せ付けられた思いでした。

いずれ、地雷が撤去されデマイナーの人々もデマイナーとして働かなくていいような世界になる日が来ますように・・・。



5、自立型地域復興活動

JMASが不発弾・地雷撤去の活動のほかに力を入れている事業として自立型地域復興支援活動というものがあります。小学校建設・道路作り・井戸掘りとメンテナンスの他、地場産業焼酎作りの提案・起業助言、日本企業誘致仲介による雇用の創出、日本語教室の開催等・・・本当にたくさんの復興支援活動を実施しています。復興するということは、必要最低限のことが満たされた生活をおくることです。タサエンへ入り、思っていたより発展しているというイメージを受けましたが、まだまだ課題は多いのが現状です。

私たちがタサエンへ入る2.3日前に村人の家に泥棒が入る事件が起こったことを聞きました。犯人は無事に捕まり刑務所へ送致されるらしいです。しかし、なぜ泥棒がおこるのだろうか。それはやはり貧しいからではないかということでした。物価も上がってきているカンボジアで、貧しい人は貧しいままで生活に苦しんで罪を犯します。逆にいうとそれは罪を犯さざるをえない状況におこまれたということだと私は思います。なぜ、罪を犯さざるをえないような状況になったのかを検討しないと、タサエンの同じコミュニンに住んでいる人の中に犯罪者を造らざるを得ない状況になるのではないだろうか。そのことを高山さんに伝えると、「どうすれば犯罪者を減らす事ができるかを考えても、その方法を誤ってはいけない。軍人にガードさせることも警察を設置する事も手段の一つではあるがそれは違う。現実を見て考えることが大事。」ということでした。どうすれば犯罪者が出なくなるかを考えるのではなく、どうすれば生活しやすくなるのかを考えれば結果的に犯罪も減るのかもしれないと思った。高山さんの言葉でいうと「枝ではなく、幹をみる」ということだと思います。本質を見る力を養いたいです。そして、表面的なことで惑わされることなく動くことを心がけていきたいと思います。

また、復興活動を進めていく中で高山さんは『自立型地域復興を考えるには歴史をしらなければならない。歴史をしらないとその現状を見て、「なぜできないんだ」となる。現状やおかれてきた状況を知る事で今の復興がここまで来たことの大さの意味を知ることができる。ポルポト時代にお金を使う事すら禁止されていた時代を過ごして、ほんの少ししかたっていない今。その時々の積み重ねの結果が今日のこの状態なのだ。そして、地域復興自体が目的ではない。目的は平和構築であるから。地雷撤去も地域復興もそれ自体が目的ではなく手段でありどちらかが欠けてもいけない。』と教えてくださいました。育った環境や価値観が違う中でお互いが文化や歴史の違いを理解し、歩み寄ることが一筋縄ではいかないことは想像にたやすい事です。そんな中で実際に住み、村人とのかかわりを大切にしながら村人とともに復興活動を行う高山さんの言葉はずっしりとした重みを感じました。

6、ゴミゼロ運動

村のみんながバレーボールをしていた所へ乱入しゴミ拾いを一緒に行うことを呼びかけました。「ソムルーソムラン！（一緒にごみを拾ってください）」と呼びかけながらごみ拾いを始めました。しかし言っているあいだ中、現地の人に私たちが上目線で注意するようでとても抵抗を感じました。もしも私が反対の立場だとしたら、突然日本から来た者にいきなり「ゴミ拾おう」

と言われた所で拾う気になるだろうか。しかし、それは後から自分勝手な抵抗だったと思いました。発展していくにつれて当然ごみは増える。以前は自然に還るゴミしか出なかったが、発展とともにビニール袋になり自然に帰らないでそのまま残るようになる。発展に対して村人の意識が追いついていかない。そこで日本の反省を生かして発展してもゴミがふえないように、発展に適応できるようにゴミを拾っていく。それが大切なのです。上から目線になるから言わないということは、ただ自分が可愛いだけです。本当に村の将来のためを思うなら言いにくいことも言わなければならないのだと身をもって体験しました。

7、タサエンでの生活

宿舎での生活は初めてのことですべてが新鮮でした。毎朝、宿舎の庭にいる鶏の鳴き声で目を覚まします。宿舎にいる猫や犬もとても人懐こくってかわいいです。ここでは犬や猫もとてもおんぶり、おおらかです。その愛くるしい寝顔はとても微笑ましかったです。毎日の食事はハウスキーパーのワンちゃんが腕をふるってくれます。カンボジアの料理や果物は本当に美味しくていつも食べ過ぎてしまいました。カンボジアではなんでも食べます。蛇やカエル、こおろぎ、バッタ、ねずみ、孵化する寸前のアヒルの卵など日本には決して味わえないものもたくさん味わいました。どれもあまりにも美味しくて調子に乗って食べていたら体重が3キロも増えていました。汗をかいて宿舎へ帰ってきてからはお風呂・・・なんてものはないので井戸水や雨水をためてある大きな水釜のような所から洗面器で水をすくってジャバジャバと水浴びをします。ほてった体で冷たい水を浴びると気持ちよくて1日に何度も水浴びにいった日もあるほどでした。あるときにはトイレは畑のど真ん中へ・・・なんてこともありました。想いのほかとても開放的な気分になれたので、自分でもびっくりでした。夜は床にゴザを引いて蚊帳をつけて寝ます。外に蚊帳つきのハンモックをつけて虫の合唱を聞きながら眠りにつくこともありました。そんな宿舎はいつでも人が絶えることがありません。村人や子供たちが遊びにきていつも賑わっています。宿舎の外で食事をした時は大人も子どもも関係なくみんな食べて歌って踊って笑って、何度も乾杯して、綺麗な夜空をみあげて最高の夜でした。そんな宿舎で過ごす時間が私は大好きでした。日本では体験することのできないことばかりで、高山さんや村のみんなにサポートしていただいたおかげでとっても楽しく安全に毎日過ごすことができました。



空がとっても広い！



ハンモックでゆらゆら



ドリアンに挑戦！

8、研修で感じたこと

研修中はバタンバンで行われたCMACとJMASの合同会議にも参加させていただく貴重な機会もありました。会議はすべてクメール語で何を言っているのかさっぱり理解できませんでしたが、緊張感から重要な会議であるということだけは分かりました。しかし、会議の途中にもかかわらずその場で携帯電話に出る、ペットボトルの容器をほったらかしにして帰る、床へ捨てて帰る、という様子を見ると日本との意識の違いが大きいと感じました。ここにいる人達はみな、それなりの地位にいて部下を指導する立場にいるはずなのにこれで示しがつくのだろうか……。人はついてくるのか……。これがカンボジアでは普通なのか……。理解できない部分もありました。

タサエンを訪れる前はカンボジアの村人はどれだけ貧しい生活を送っているのか見て見たいという気持ちがありましたが、彼らと接して感じたのは貧しさよりも心の豊かさでした。カンボジアの人たちは大人も子どもも損得のものさしではなく、深い心と静かな思いやりをもって接してくれます。子どもたちと食事をしているときも、当たり前のように自分が食べる分を私のお皿に入れて「食べて」というジェスチャーをしながら無邪気に微笑みます。おそらく、子ども達の周りの大人が自然とそうしているから子供たちにも自然なこととして身に染み込んでいるのだと思います。素晴らしいと思います。幸せはこんなに身近で小さなコミュニティの中、日常の中から生まれて受け継がれていかれるのだと思うと、胸にこみあげてくるものがありました。

それからこれを読んでいる中にも、もしかすると前の私のように初めの一步がなかなか踏み出せずにいる方がいるかもしれません。もしそうだとしたら思い切って飛び出してみたいです。私が言うまでもありませんが、インターネットや人から得る情報ではなくリアルな感覚として現場を肌で感じる事ができるからです。

9、おわりに

今回私たちが研修をすることができたのは周りの人々のおおきな支えと理解があったからこそ実現できたのだと改めて深く感謝しています。素晴らしい機会を与えてくださったおかげで貴重な経験をすることができました。カンボジアで過ごした毎日は私の心に深く刻みこまれています。この1週間の経験はこれから生きていく上で大切な意味を持つものだと思います。そして私はカンボジアが大好きになりました。いつも笑顔で丁寧にご指導くださった高山さん、思いやりをもって接してくださった村人のみなさん、JMASスタッフの皆様には感謝してもしきれません。本当にありがとうございました。

